

## 古代アメリカ諸文化における在地性

渡部 森哉\*

論集 9 号をお届けする。

本論集は 2018 年度に南山大学人類学研究所主催で実施した講演会、シンポジウムの内容に基づいている。2018 年 11 月 23 日には杉浦洋子氏の講演会、11 月 25 日にはシルヴィ・ペパストラート氏の講演会を実施した。また、2018 年 12 月 26 日には 2018 年度第 4 回公開シンポジウム「遺跡に見る在来知—モニュメント、自然環境、インターアクション」が実施され、4 本の発表があった。

いずれも古代アメリカの先スペイン期を対象とした内容であり、関連があることから 1 つの論集にまとめることとした。6 本の論文に通底するテーマは在地性である。すなわち古代アメリカの諸文化の特定の地域に限定される特徴に着目した論考である。古代アメリカに共通する特徴と対比させることでより広がりが見られるであろう。

ペパストラート論文は、中米のアステカ王国の首都テノチティランを中心に存在した神官に関するものである。絵文書、植民地時代の記録文書、考古学データを組み合わせ、アステカの神官がどのように同定され、どのような役割を担っていたのかを鮮やかに描き出している。メキシコの他の地域にはどのような神官がいたのか、メソアメリカ全体に当てはまる汎用性のある解釈はどの部分かなど、今後の研究テーマをも示している。

杉浦論文は、メキシコ中央高原のトルカ盆地を対象とした長年にわたる調査の一部である。様々なデータを駆使し、当時そこに生活していた人々の息づかいをも感じさせてくれる。同時代のメキシコ中央高原のテオティワカン中心史観からは見えないメキシコの文化動態を再構成する。特定の地域の文化研究がどのように行われるべきか、その手本となるような論文である。

続く 4 本の論文はシンポジウムの報告であるが、嘉幡論文はシンポジウムの際のモニュメントに関する報告とは内容を変え、トルカ盆地の黒曜石に着目し、ローカル性を論じる内容となっており、杉浦論文と接合している。黒曜石の原産地分析を行い、原産地ごとの割合が通時的にどのように変化するかに着目する。テオティワカンといった巨大のセンターとの中心と周辺という関係だけではなく、周辺と周辺の関係という視点を導入し解釈することの重要性を指摘する。

市川論文は火山の多いエルサルバドルを事例として、そこに住む人々が火山の噴火という出来事をどのように経験したのかを論じる。自然災害を意味づけるために、人々が神殿ピラミッドを建設し秩序を保っていたという解釈を通じ、社会の再編過程で多くの集団が組み込まれていったことを指摘する。知恵や記憶といった概念を用い、環境と人間の関係を双方向的に捉える重要な視点を提示する。火山のある場所というローカルな事例であるが、そこからより大きなテーマに接合する視点を提示する。

続く 2 つの論文はアンデス考古学でホライズンと呼ばれる 3 つの時期を対象としている。松本論文は前期ホライズンを対象とし、その研究において中心となるチャビン・デ・ワンタル神殿がどのように扱われてきたのかを論じる。チャビン問題と呼ばれるこのテーマは、チャビン・デ・ワンタルと他の地域の神殿との関係をどのように捉えるかという問題であり、在地性がどのように扱われてきたかに着目し、研究史を辿る。チャビンという特定のテーマに関する論考ではあるが、在地性をどのように研究者が扱ってきたかを考察する模範的な論文であり、他の時代他の地域を専門とする研究者にも多くの示唆を与えてくれる。

渡部論文は中期ホライズンと後期ホライズンという 2 つの

\* 南山大学

時代を扱う。まず先スペイン期最後に台頭したインカ帝国を事例として、中央と地方の関係を捉える視点をまとめ、インカをモデルとして中期ホライズンの代表的な社会であるワリ帝国を考察する。ローカルとされる特徴をいくつかに分類する必要性を指摘し、その一部はむしろ中央の政策によって決定されていたと述べる。

この論集9号を刊行するまで多くの方のお世話になった。関係者にお礼申し上げます。